

青山学院大学における日曜礼拝

塩 谷 直 也

2018年、青山学院大学宗教主任会の主催で、春と秋に6回の日曜礼拝（10：30～）がガウチャー記念礼拝堂にて行われた。¹ 本論は、この日曜礼拝が行われるまでの経緯と、実践して明らかになった課題の記録である。

①経緯

東京都内にあるキリスト教主義の大学、ICU、立教大学はキャンパス内の教会で日曜礼拝を守っている。上智大学もイグナチオ教会が隣接し、日々のミサが行われている。「安息日を覚えて、これを聖別しなさい。六日間は働いて、あなたのすべての仕事をしなさい。しかし、七日目はあなたの神、主の安息日であるから、どのような仕事もしてはならない。」（出エジプト20章8～10節）²との言葉に従い、毎週日曜日午前に行われる礼拝は、有形無形のエートスをキャンパスに漂わせる。声高に「建学の精神」を語らなくとも、それぞれの大学で何が大切にされているか、「話すことも、語ることなく 声は聞こえなくとも その響きは」（詩19編4～5節）³ 聞こえてこないだろうか。一方、青山学院は青山学院教会が諸事情により学外に移転（1968年）し、それ以来日曜礼拝は途絶え、日曜午前の時間帯が空洞化した。⁴ それを補う形で宗教主任は授

1 その他オープンキャンパス（8月5日）、同窓会礼拝（9月23日）でも日曜午前の礼拝がガウチャーで行われた。よって2018年に8回の日曜礼拝が守られたこととなる。

2 『聖書』、聖書協会共同訳、日本聖書協会、2018年。

3 『聖書』、新共同訳、日本聖書協会、1988年。

4 日曜朝の礼拝は消滅しながらも、日曜午前の礼拝堂使用は原則禁止となった。青山学院礼拝堂使用規則 第4条「日曜日の午前中については、礼拝以外を目的とする礼拝堂の

業期間中の日々の大学礼拝（10：30～11：00）、全学必修科目のキリスト教概論Ⅰ・Ⅱ、キリスト教諸活動に注力してきた。しかしそれだけでは建学の精神⁵の堅持、学内伝道の進展、学生を教会につなげるという目的を達せられないのではないか、との議論が長年、宗教主任会でなされてきた。洗礼を受ける直前まで行きながら、学生たちを地域教会へつなげることができないケースがたびたび報告されており、少なくない宗教主任が日曜礼拝を喫緊の課題であることを節目ごとに提言していた。

この課題を受け止め、2018年3月7日、大学宗教主任と宗教センター懇談会で、具体的な日曜礼拝（この時点ではSunday assemblyの言葉を使用）の可能性を探った。ここでは西谷幸介宗教主任（当時）の案をもとに、筆者（塩谷）が以下のような提案、期待される効果、問題点を提示し、意見交換がなされた。

どのような日曜礼拝が望ましいか

●教会にならない教会（聖礼典は行わない。⁶ 青山学院教会の復活ではない）。

イエスを遠くから眺めるザアカイのポジションを射程にした「いちじく桑の木」の礼拝。⁷ 学校と教会の中間地帯。川の水と海水が混ざり合う場所。

使用は、原則として認めない」。ただ現在日曜のキャンパスは外部貸し出しを含め稼働率は高く、日曜午前における「礼拝以外を目的とする礼拝堂の使用」を求めてくるケースもある。

5 「建学の精神」とは、具体的に青山学院寄付行為第4条「青山学院の教育は、永久にキリスト教の信仰に基づいて、行わなければならない」を指す。

6 西谷案は聖礼典を行う。（西谷幸介、『教育的伝道—日本のキリスト教学校の使命』、ヨベル、2017年、361～371頁）この場合、聖礼典の執行決定者・責任はどこにあるのか議論を要する。

7 ルカ19章1～10節に描かれる物語。事情によりザアカイは「いちじく桑の木」という離れた場所からしか、イエスを見ることはできなかった。しかしその場所にイエスからの声が届き、ザアカイの救いが生まれる。この物語は、イエスから離れた場所、すなわち伝統的な教会から離れた場所での神礼拝と救済が行われる可能性を示唆する。

淡水魚と海の魚が共生する場としての礼拝。

- 宗教センター関係外の人々による草の根的集会であること。原則、宗教センターの業務増加は認めない。⁸（宗教センター職員は全員クリスチャンであり、各自の教会出席があるので参加できない）
- 献金は原則、全て指定献金。（例えば給付型奨学金などに充てる）

期待される効果

- 大学礼拝から教会礼拝への橋渡しの場
- 校友の帰る場、青山学院のサポーターの創出、セカンダリー生徒と保護者の集まる場、青山学院進学希望者・関係者の集まる場とならないか。
- 青山学院教育方針、建学の精神の本質的担保。

問題点

- 学院での人間関係を安易に持ち込まない（職場の延長線上にならない）ためには、どうしたらいいだろう？ 安息日になるか？
- 結局宗教センターが仕事を引き受けざるを得なくなるのではないか。

この話し合いの末、「延々と議論を繰り返すよりも一度試しにやってみよう」とのコンセンサスへと至った。新年度を機に試験的に行いながら、データ（アンケート）を取ったうえで、日曜礼拝の可能性をあらためて宗教主任会で議論することとなる。

この宗教主任会の動きと並行して、学院連携本部（旧エバークリーン募金推

8 西谷案は日本基督教団（以下、教団）の管理による教会の提案。聖学院教会のスタイルがモデル。ただしこの場合は教団＝東京教区＝西南支区の承諾、および教団と青山学院間の提携の取り決めなど実現までの手続きは増える。

進本部)からの提案、協力体制が築かれていく。学院連携本部は、青山学院のブランド価値を高めることが安定した財政基盤を確立すると考え、早い段階から青山のブランドとはキリスト教であり、その本質が日曜礼拝にあることを唱えていた。その流れから連携本部職員による実務部分での協力を得られることとなり、日曜礼拝実現への具体的方策が徐々に形になっていく。連携本部職員がICU教会、立教の諸聖徒礼拝堂の日曜礼拝に参加、実際に各大学キャンパス内の日曜礼拝実施状況を見聞した。それらを踏まえ、青山学院では礼拝後にティー・パーティを開くことなどが連携本部から提案される。このティー・パーティは後に日曜礼拝の大きな特徴となっていくこととなる。

②新入生歓迎日曜礼拝

この日曜礼拝が通常の「大学礼拝」(月～金 10:30～11:00)と違う点は、時間の長さ(約25分➡1時間)と献金があることである。しかしことはそれほど単純ではない。1968年に青山学院教会が学外に移転・合同して以来、「礼拝のみが目的の日曜朝礼拝」に関する正式な記録はない。そうであれば青山学院50年ぶりの日曜朝の「礼拝のための礼拝」であり、実現に向けて多くの困難が予想された。日曜日午前の礼拝堂の管理責任を誰が持つか、礼拝開始に関し地域教会へどう説明するか、ノンクリスチャンの学生への協力要請(クリスチャン学生・教職員はそれぞれの教会に出席するため参加できない)、「果たしてこの忙しい時代、日曜の朝に人が集まるのか?」という素朴な疑問。「時期尚早か…」とあきらめかけるたびに、幾度となく不思議に道は開かれ、理事長、院長からも承諾を受け、正式にゴーサインが出されたのが実に2週間前であった。

日程は前期チャペル・ウィーク終了後の日曜、5月27日より隔週3回となった。急遽オルガニストの手配、大学聖歌隊の奉唱依頼を行い、了解を得る。大学宗教主任は「キリスト教概論」の授業を中心にチラシを配布、学院連携本部は独自のチラシやホームページなども活用し、限られた時間で周知を続けた。

初日を迎えた5月27日、告知が不十分であったにも関わらず約130名の人々が集まり礼拝が行われた。連携本部が用意した礼拝堂玄関前でのコーヒー、ドーナツの配布は予想を超えて好評だった。その後6月10日200名、24日270名の参加者となる。しかも学生のみならず教職員、卒業生、別件でたまたまキャンパスにいた親子連れ、多くの人々が礼拝後のティー・パーティーまで残り、学院連携本部提供のコーヒーやドーナツを味わいながら歓談して散会した。世代を超えて談笑しあう参加者を眺めながら、青山の新しい文化の始まりを予感したのは、決して私だけではなかったはずである。

計3回の主な記録は以下となる。

5月27日 晴れ 参加者約130名 教会案内（美竹教会、荻窪清水教会）
説教者 塩谷直也 宗教部長
司 式 榎本美枝（学院連携本部）
奉 唱 大学聖歌隊（指揮 那須輝彦）オルガニスト 坂戸真美
ティー・パーティ 玄関外

6月10日 小雨 参加者約230名 教会案内（中渋谷教会）
説教者 森嶋 豊 宗教主任
司 式 榎本美枝（学院連携本部）
奉 唱 大学聖歌隊 オルガニスト 坂戸真美
ティー・パーティ エスカレーター・ホール（雨のため玄関前から移動。後にティー・パーティは全てホールとなる。）

6月24日 小雨のち晴れ 参加者270名 教会案内（恵約宣教教会、阿佐ヶ谷教会、大学同窓祭礼拝）
説教者 藤原淳賀 宗教主任

司 式 榎本美枝（学院連携本部）

奉 唱 大学聖歌隊 オルガニスト 身崎真理子

ティー・パーティ エスカレーター・ホール

この3回の礼拝を通し、以下の点が確認されていった。

- 礼拝を1時間以内に納め、ティー・パーティを含め、12時までに礼拝堂を完全撤収。（その後の礼拝堂使用団体がいるため）
- 地域教会の橋渡しのため、礼拝最後の報告時に地域教会の案内を入れる。
- 聖歌隊奉唱の評価が高いこと、ティー・パーティが予想以上に喜ばれたこと。

「キリスト教概論」受講学生が、課題の礼拝レポートを作成するためにこの日曜礼拝に参加したという事実を差し引いても、この礼拝は内外に高い評価を得た。これで終了する理由はない、との結論が宗教主任会から出され、後期も同様に行うこととなる。

③秋の学生歓迎日曜礼拝

さて後期もチャペル・ウィーク終了後の10月21日から隔週3回の日曜礼拝を開催する運びとなったが、その際、宗教主任会はより厳密に、改めて日曜礼拝の目的を定義した。

大学日曜礼拝の目的

- 日曜の朝の使い方＝キリスト教のライフスタイルの体験提供
- 地域教会への橋渡し
- 大学礼拝・キリスト教概論のエクステンション
- 日曜午前の青山キャンパスに集う人々への伝道

●建学の精神の堅持

更に「青山学院大学日曜礼拝」が教会形成を目指すものではない、ということ
を明らかにするために、以下の申し合わせをも行った。

教会にならないための申し合わせ

- 礼拝全体の大学宗教主任による ^{スーパーバイズ} 監修 ～大学礼拝の延長線上であること
- ノンクリスチャンコードの設定
クリスチャンコード適用は司会者、説教者（大学宗教主任）のみ。ノンクリスチャン学生に積極的に参加してもらう。またそのため複雑な礼拝所作を奉仕者・参加者に求めない。
- 礼拝前後の計画的二次的集会を行わない。（ティー・パーティのみ）
- 聖礼典は行わない。
- 継続的参加者を求めるのではなく、流動的な多様な学生が集散することを目指す。地域教会への橋渡しをする「橋」の役割に徹する。（橋は居座る場所にあらず、しかし時として人が立ち止まる場所ではある）

以上を確認し、後期は宗教センター職員有志からも一部協力を得て、再び3回の礼拝が行われる。（ティー・パーティは全てエスカレーター・ホール）

10月21日 晴天 参加者114名 教会案内（東京バプテスト・チャーチ）

説教者 塩谷直也 宗教部長

司 式 浅見真人（宗教センター）

奉 唱 大学聖歌隊 オルガニスト 坂戸真美

11月4日 晴天 参加者240名 教会案内（聖ヶ丘教会）

説教者 大宮 謙 宗教主任

司 式 榎本美枝（学院連携本部）

奉 唱 大学ハンドベル・クワイア（指揮 鷺晶子）

オルガニスト 坂戸真美

11月18日 晴天 参加者124名 教会案内（東京ユニオンチャーチ、東京山手教会）

説教者 伊藤 悟 宗教主任

司 式 足立茂久（宗教センター）

奉 唱 大学聖歌隊 オルガニスト 身崎真理子

のべ参加者 前期 630名 後期 478名 総計 1108名

平均参加者 前期 210名 後期 159名 6回平均 184名

④今後の課題

計6回の日曜礼拝を終えて、大学宗教主任会、また関係者との振り返りを行い、最終的に以下の課題が出された。

●献金の説明、その使い方の方向性

礼拝を初めて体験する学生にとって、礼拝中の献金プログラムは常に戸惑いを覚える瞬間である。その都度明確な説明が求められる。献金の意味だけでなく（回された献金袋を持ったまま動けない学生が少なからずいたことから）、その実施方法も毎回説明が必要。

●日曜日のキャンパス、他のイベントがある時のほうが、関係者の常駐、安全上の問題、正門の開け閉めなどを含め、開催しやすい。

日曜礼拝を始めて驚いたことの一つが、青山キャンパスの日曜日の活気である。地の利を活かし、各種団体の研修、資格試験会場として多くの人々が

出入りしている。その人たちへの何らかのアプローチも必要かもしれない。

●大学宗教主任会、宗教センター、学院連携本部の協力体制の構築。

手探り状態の中で開催を続けたため、時として「司令塔」不在の状況となり混乱が生じた。明確な責任分担、指示の流れを確立する必要がある。最終的に以下の形で、各部署が役割を担ったが、これはあくまで結果であって、この役割が今後固定される訳ではない。

大学宗教主任会	宗教センター	学院連携本部
●説教者（大学宗教主任）の推薦及び礼拝全体の監修 ●聖書箇所、讃美歌、交読文選定。 ●司式者、教会案内の決定。 ●学生奉仕者（聖書朗読、献金祈祷者、その他）の選出。	●主任会の指示を受けてオルガニスト、奉唱団体（聖歌隊等）への依頼。 ●プログラム作成。 ●学生への広報（チラシ、立て看板、ポータル、HP掲載） ●ティー・パーティのお菓子選定、発注、受け取り。	●当日の正門の状態の確認、礼拝堂の開け閉め。 ●礼拝奉仕者（学生）の取りまとめ、受け付け、聖書朗読、献金者の動きなどの指導。 ●ティー・パーティ準備及び費用負担。 ●献金管理。

●クリスチャン奉仕者への配慮。

協力してくれたクリスチャン教職員は、それぞれの出席教会の礼拝を欠席している。そのことで生じる諸問題が予想される。無理な奉仕依頼とならないよう配慮が必要である。

●学生奉仕者を集めることの意義と同時に困難さ。

ノンクリスチャンの学生奉仕者が大きな働きをしてくれた。それと同時に、日によっては学生奉仕者を集めるのに苦労し、宗教主任やその家族に奉仕依頼をする場面もあった。

●ティー・パーティ用お菓子発注数、礼拝プログラム印刷数決定の難しさ。

平常の大学礼拝、また地域教会の礼拝と違い、毎回出席者数が読めない礼

拝であったことは、この日曜礼拝の大きな特徴である。よってお菓子やプログラムが多すぎたり、少なすぎたりの繰り返しとなった。もちろん今回の参加者人数が、次年度の参考になる可能性はある。

●11月の繁忙期、2回の礼拝開催は厳しい。

大学は秋に様々なイベントが行われる。その忙しい中、学院連携本部と宗教センターの職員の負担は大きなものであった。職員の業務をいわずらに増加させない、持続可能なスケジューリング、また準備の軽減が課題である。

●地域教会への橋渡しになっていたか

日曜礼拝参加後、数人の学生がその後地域教会の朝礼拝に参加、または参加の意思を表明したとの報告を受けている。しかしその実数を限られた期間で全て把握することは難しい。加えてこの日曜礼拝最後に行う「教会案内」を教会に依頼しても、懐疑的に受け止められ、断られたケースもあった。私たちの説明不足、拙速さが原因かもしれない。今後とも地域教会に説明を尽くしつつ、共に日本の宣教を担っていければと考える。

関係者からは「良くも悪くも青学が礼拝すると人が集まる。これだけの若者を日曜の朝に集められる場所はそうないであろう。学生を教会につなげようとあまり焦ることなく、じっくりと継続したらどうか。慎重かつ大胆に日曜礼拝を続けていきたい。」との声が寄せられた。おそらくこれは、今回の日曜礼拝に携わった多くの者たちの思いであるに違いない。

最後に、礼拝に参加した学生、関係者からのアンケートのコメントを一部紹介する。「いきなり地域の教会に行くのは不安だったので、大学で体験できてよかったです。」「歌が多くて楽しかった。ぜひ今後も続けてほしい。聖歌隊の歌をもう一曲聞きたかった。今後、妹とも行きたい。」「キリスト教の礼拝に対して敷居が高いイメージがありましたが、今回の青山学院の日曜礼拝を通し

て、そのイメージが変わりました。」

今後どのような形で日曜礼拝が育つか未知数ではあるが、多くの学生がこの「あたらしい日曜の朝の過ごし方」を体験し、続けて地域教会の礼拝にも参加することを切に祈るものである。